

EE 形成のハブ機能を果たす大学教員・研究者の育成過程について ～TEM 図を用いた人生経路の探求～

開志専門職大学 事業創造学部 東城 歩
長岡大学 経済経営学部 栗井 英大
(査読論文)

要旨

本研究の目的は、世界中の多くの研究者がその研究対象としている「アントレプレナーシップ教育及びアントレプレナーシップ・エコシステムの形成」について、新潟という地方都市で大学教員・研究者として取り組み成果を上げてきた新潟大学伊藤龍史氏に注目し、伊藤氏がどのような過程を経て大学教員・研究者の道へ進んできたのかの要因を明らかにしようとするものである。

筆者は、伊藤氏が新潟大学に着任し、活動を始めるまで、当該地域において学部教育レベルにおいてアントレプレナーシップ育成等について目立った動きがなかったことに注目し、これまでも伊藤氏の活動、その研究に対する考えについて話を伺う機会があった。そのような中で、伊藤氏の研究者として根幹を成す部分に興味を惹かれるようになり、今回の研究を進めるに至った。

まず、伊藤氏に幼少期から語ってもらう面接（インタビュー）を行い、それをベースに KJ 法による文章化を行い、そのストーリーを基に TEM 図化を進めた。

次に TEM 図化のルールに従い大学教員・研究者になるまでの道程を示し、それぞれの段階における分岐点から等至点に至る各ポイント等を中心に分析を行い示した。

本研究は、個人の経験・体験に基づく「ライフストーリー」から TEM の概念を用い、研究協力者の人生経路を丁寧に探求したものであり、今後予定している「大学教員・研究者としてどのように活動してきたのか」について調査・探求していく前の段階に位置付けられるものである。

キーワード：TEM、ライフストーリー、大学教員・研究者、アントレプレナーシップ、アントレプレナーシップ・エコシステムライフサイクル

1 はじめに

筆者は、2021年から新潟大学経済科学部伊藤龍史研究室に所属し、地方都市におけるEE(アントレプレナーシップ・エコシステム)の形成や、その形成における大学・大学研究室的役割、併せてアントレプレナーシップ育成教育などについて研究を進めてきた。

現在、我が国においては、その国際競争力の低下から、アントレプレナーシップの育成、EEの構築などが喫緊の課題として議論されている。このような状況下において、最も重要な事項は「人材の育成」であり、また、「産官学の連携」を地方都市でいかに構築していくかである。ここでは、これまで様々な困難に直面しつつ、十数年にわたり新潟大学経済科学部での講義、ゼミの運営等様々な活動を通じて、新潟という地方都市で、アントレプレナーシップ教育及びアントレプレナーシップ・エコシステムの形成の一翼を担い、一定の成果を上げてきた新潟大学伊藤龍史氏に注目し、その活動の基礎となった大学教員・研究者になるまでの育成過程をTEM(Trajectory Equifinality Model: 複数経路・等至性モデル)によって可視化し、大学教員・研究者になるまでの活動を促進・阻害する要因について探っていく。

これは、これまであまり注目されることがなかった、「アントレプレナーシップ教育及びアントレプレナーシップ・エコシステムの形成」に関わる大学教員・研究者の育成過程に注目したもので、大学教員・研究者として、そのパーソナリティ特性の形成にかかる人生経路を明らかにすることを目的としているもので、この後予定している「大学教員・研究者としてどのように活動してきたのか」についての研究を理解するための基礎となる位置づけである。

これらの事項を明らかにし、検討することは、伊藤氏がどのような紆余曲折のなかで大学教員・研究者への道へ進むことになったのかを明らかにするだけでなく、今後、大学教員・研究者をどのように育てていくかについても新たな視点を提供するものであるとともに、産官学連携においてアントレプレナーシップの育成の促進を促す意味においても何らかの示唆を与え役立つものであると考えている。

2 研究の方法

2.1 調査協力者と筆者との関係

調査協力者の新潟大学経済科学部准教授伊藤龍史氏は、2009年新潟大学へ着任、学部、大学院での講義及び、伊藤ゼミの開講を機にアントレプレナーシップの育成、起業を目指す学生の支援、併せて産官学の連携強化に取り組んできた。現在は、自身の研究活動、講義、ゼミの運営、研究過程での指導等を続ける傍ら、自らもこれまでの知見を

活かす形で、企業へのアドバイザー業務などを提供する「合同会社 RJ's リサーチ・アンド・アドバイザー（新潟市西区）」を設立し事業を開始した（これは同大学の経済科学部として、初のベンチャー企業発足となるものである）。伊藤氏は、これまでの教育現場での経験と、産学連携、地域連携等から得た多くの知見から、主に一般化を志向する学問の世界と、個別化を必要とする実践の世界との間にはある種の隔たりがあることに気が付き、経営の実践に対して学術的な側面からサポートをすることを目指し起業し、経営に携わっている。これらの活動によって、地域のアントレプレナーシップについて、教育界とそれを実践する実社会の間に新たな連携の形を提案している。

筆者はこれまでの研究活動等で相談に乗っていただくような関係ではあったが、自身の研究をより深めていく理由で2021年に新潟大学博士後期課程伊藤龍史研究室に入室したため、現在は筆者の指導教員という関係である。

なお、この関係性の利点としては、筆者も調査協力者と同じ大学教員（開志専門職大学事業創造学部）であり、共通の話題なども多く、面接（インタビュー）がスムーズに進んだことがあげられる。一方欠点としては、筆者自身の経験からくる思い込みや先入観が、本研究の過程で影響を与えないように常に気を付ける必要があったことである。

2.2 分析方法としての TEM 図とデータの収集方法

本研究の分析的枠組みとして、時間の経過に伴う変化を丁寧に見ていく必要があるため、複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model:以下 TEM）を用いている。これは、個々人がそれぞれ多様な径路を辿っていったとしても等しく到達するポイント（等至点）があるという考え方を基本とし（安田、2005）、人間の発達や人生径路の多様性・複線性の時間的変容を捉える分析・思考の枠組みモデルである（荒川・安田・サトウ、2012）。

データ収集方法としては、半年間にわたり、伊藤氏の研究室を訪問し、4回の面接（インタビュー）を行った（表1）。1回目は伊藤氏の許可を得て録音し、その後、そのデータをもとに逐語記録を作成した。

1回目に行った半構造化面接では、複数の質問をあらかじめ用意したうえで、伊藤氏に自由に語ってもらった。2回目の面接（インタビュー）では、1回目の面接で得られたデータから分岐点を探り、その前後に何が起きていたのかについて、より掘り下げる形で非構造化面接を行った。3回目は2回目の面接（インタビュー）を踏まえて、分岐点となった出来事の前後に生じた内的・外的な変化を詳細に語ってもらう非構造化面接を行った。より鮮明に当時の様子を語ってもらうことができ、筆者としては、分岐点の設定が、より明確になったように感じる事ができた。4回目の面接（インタビュー）では、ここまで3回の面接（インタビュー）で得られたデータをベースに TEM 図を作成し、作成した TEM 図を伊藤氏に直接見てもらいながら感想などを述べてもらう非構造

化面接を行った。

表 1 面接の概要及び質問事項

	時間／形式	直接の質問項目
第 1 回	2.5 時間／半構造化面接	① 幼少期から中学生時代を振り返って ② 高校生時代を振り返って ③ 大学生時代を振り返って
第 2 回	1.0 時間／非構造化面接	① 分岐点となった出来事の前後にどのようなことが起きていたか、内的・外的な面で生じた変化について ② 第 1 回の面接後に思い出したことなど
第 3 回	1.0 時間／非構造化面接	第 2 回の非構造化面接によって、記憶が整理され、分岐点となった出来事の前後にどのようなことが起きていたか、内的・外的な面で生じた変化について、より詳細に語ってもらう
第 4 回	1.5 時間／非構造化面接	作成した TEM 図を直接見てもらい、伊藤氏の意見を聞きながら面接し、コメントをもらう

2.3 TEM 作成の手続き

1 回目の面接（インタビュー）で作成した逐語記録をもとに KJ 法（川喜田、1967）の手法を用いて文章化を行った（表 2、表 3 ①、②）この文章化されたストーリーをもとに TEM の概念にもとづき、分岐点（Bifurcation Point: BFP= 文化的・社会的な制約と可能性の下で実現される意思や葛藤・迷いを含む個別多様な歩みを複数に分かつポイント）として、①自身で考える楽しさを知る。②塾で競争することの楽しさに目覚める。③修猷館高校での生活④学部での学び⑤坂野研究室での活動とし、等至点（Equipfinality Point: EFP= 研究目的に基づき、ある行動や選択を焦点化するポイント）として、①修猷館高校合格②早稲田大学合格③新潟大学に着任とした。

また、必須通過点（Obligatory Passage Point: OPP= 等至点を経験した人のうち「通常ほとんどの人」がある状況に至るうえで必ず通るもの、また制度・法律・習慣など文化的・社会的・現実的な制約の有り様とそれをもたらす諸力を見つける手掛かりになるポイント）として「早稲田大学修士課程廣瀬研究室での研究活動」を設定し、その他に、社会的方向づけ：SD (Social Direction= 等至点に向かう個人の行動や選択に制約的・阻害的な影響を与える諸力のこと) と、社会的ガイド：SG (Social Guidance= 等至点

向かう有り様を促したり助けたりする力を象徴的に表した諸力のこと) をそれぞれ示し、さらに、統合された個人的志向性 (Synthesized Personal Orientation) の概念を加えている。「TEM のための概念表」(表 4))。なお、KJ 法に準拠した TEM 図作成手続き方法は、「DV 被害者支援員としての自己形成 (佐藤紀代子) 2012」を参考に進めることとした。この方法によってポイントの選択が円滑に行うことができ、TEM 図の作成への流れについても的確に移行することができた。これは、本研究のテーマから、伊藤氏の幼少期からの成長過程に沿って進めることができ、それは、同じく幼少期から成長過程を経験してきた筆者にとっても理解し易かったことも影響していると考えられる。

また、筆者は 1 回目の面接 (インタビュー) の後、2 回目、3 回目の面接 (インタビュー) を経て TEM 図の作成を行っているが、これは、データの整理、それにもなう事項の確認を慎重に行おうとしたためである。

4 回目の面接 (インタビュー) では、上記を踏まえ作成した TEM 図を伊藤氏に直接見てもらい、訂正・修正点についてコメントをもらった。TEM 図にしたことで、情報が整理されること、また、時間の行き来が簡単にでき、これまでの面接で聞くことができた事項についてはより深く、また、面接時に聞くことができなかった事柄も飛び出すなど、今後、次の研究対象 (伊藤氏の大学生時代のキャリア選択について、より深掘したものや、新潟大学着任後の教員・研究者としての活動の軌跡など) に繋がる話も聞くことができ、本件について TEM 図化したことで、伊藤氏も筆者も客観的視点で捉え直すことが可能となり、TEM の設定のアウトラインを適正に行うことができたと考えている。

表 2 KJ 法の手続き

①	逐語を「出来事」と「それにまつわるエピソードに分けてカードに書き出す。
②	関連しているカードをグループにまとめる。
③	関連しているグループを線で結び図式化する。
④	抽出した文章をつないで図式化した全体を文章化する

表 3 KJ 法により完成した文章①

<p>・幼少期から中学生時代</p> <p>当時与えてもらったブロック遊びなどの影響で、自分一人で何かを作ることが好きになり、あまり人と集まって遊ぶようなことはしていなかったが、<u>オリジナルの遊びを実践していたら、それに周りも興味を持ちチームになった (SG1)。</u> <u>自分の発想が人を惹きつけることの面白さを感じた。</u> <u>また、授業などでは、他の人が思いつかなかったものなどを答えることができ、それに対して褒められてなんとなく嬉しい感覚があった (BFP1)。</u> <u>先生のオリジナル教材が面白く社会科の科目を好きになったりした。</u> <u>誰に言われた訳ではないが、自分で思い立って 5 年より進学コースに入塾</u></p>

(BFP2)。振り返ってみると、学者である父が常に学んでいる姿を見て育ち、どこかで勉強は日常を生きるひとつのやるべき作業であると思っていたのかも知れないと感じる (SG2)。しかし、全くの準備不足がたり、入塾した最初のテストが2点であった (SD1)。しかし、6年生から授業復習コースに変更したことで基礎を理解することができ、その後は良い成績を保つことができるようになった。振り返ると大きなターニングポイントとなったと考えている。

両親からは「○○しなさい」などと言われることがなかったが、当時の中学が荒れており、学業レベルもあまり高くなく「中学に通う必要があるのか」と煩わしく思い、塾へ気持ちが向くようになった。また、塾ではテストで良い成績だと名前と所属中学が張り出され、そうなるにあれだけ行きたくなかった中学であってもその代表としての感じがあって嬉しく、また、順位の掲載を競うこともゲームのように面白く思えてきて成績も上がり (SG2)、修猷館高校に合格することができた (EFP1)。

・ 高校生時代

地域の各校トップクラスが集まる学校で、でもだからと言って学業一辺倒ではなく何事にも一生懸命向き合う姿勢。「同じような人たちが集まった状態で、ただ楽しかった。また、修猷館に入ったお祝いを祖父が泣きながら留守番電話に残してくれた。祖父の世代からしたら孫が修猷館に入ることがそれほど嬉しいことなのかということを感じ、また、これは責任をもって高校生活を過ごさねばならないと感じた (SG3)。この時期は、今後自身がどういう武器をもつかというスタイルばかり考えて実行に移すことができていなかった (SD2)。しかし、3年次の三者面談を経て、いよいよ受験と向き合うと決断する (SG4)。修猷館では9月に体育祭が終わると一気に受験モードに突入するが、自身もその流れの中で学業に専念するようになる (BFP3)。その段階での成績では希望する大学に進学できるレベルではなく、配られた一学年上級の合格体験記は (優秀過ぎて) 参考になるものが殆どなかったが、応援団の先輩のものを唯一の支えとし、早稲田大学の商学部合格する (EFP2) ことができた。振り返ると、「自分が持っているはず以上の力を周りの環境が引き出ししてくれた」と感じている (SG4)。大学の選択については、具体的に自分の関心がどこにあるか分からなかったため、父と相談し、早稲田、慶應、中央に絞り込み、早稲田に進学。商学部の受験は得意の地理が選択できるからであって、特に商学を学びたいという明確な意思があった訳ではない。しかし、この時点で、「将来は大学教員になりたい」という気持ちも少しはあった。

表3 KJ法により完成した文章②

・ 大学生時代 (院生時代も含む)

修猷館と比較して周りのレベルの高さは感じなかったが、学部での学びの世界があまりにも壮大で迷いが生じてしまい (研究者として生きるとすれば) その中からどこか一本の木を見つけることの難しさを痛感した。そしてそれは大学院に入る直前まで続いた (BFP4)。

講義では、多くの学生の前で手際よく講義をする教員をみて「自身の父親も同じ仕事なのだ」と

改めて思い、またそのような先生方が皆自分の父親を知っている。それまでは一番身近な職業として意識していた研究者・教員であったが、「これは本当に好きなものを見つけないと研究者・教員にはなれない」と危機感を感じた (SD3)。

はっきりとした方向性が見つからないまま、修士課程では会計学の廣瀬研究室の門をたたく (OPP)。ここで、「会計」という世界での父の偉大さを知り、会計という世界では、父親は簡単に口を聞けない存在で、自身がレベルアップしてから話をするのが礼儀だと思ふようになり、一番近くにいたはずの父親が、実はずっと遠くにいて、その差に気が付いてしまい、大きなショックを受ける (SD4)。

廣瀬研究室で会計学の研究を進めていくなかで、会計学は自分の考えている研究の姿とは違うことが分かり始める。しかし、一方で、この会計学という分野で世界のトップになるにはどの分野に進むべきかについて考えるようになる (財務会計は研究者が多い、税務会計はどうか、など)。

しかし、やはり会計学は自分が研究したいものとは違うということ、また、この時点から別の研究室に移ろうと考えている院生の存在も知り、廣瀬先生に相談した上で廣瀬研究室を離れることを決意する (SG5)。

学務委員で進路の相談にのっていただいた経営戦略論の坂野友昭先生の研究室を尋ねてみる。その時の坂野先生が「凄く頭の切れる方であり、またとても話しやすい」ということ、併せて経営戦略論について調べたところ、学問として「面白い」と思えるもので、この先生、**この研究室であれば自身が進めていきたい研究スタイルが実践できそうだと思い博士課程からは坂野研究室へ進んだ (BFP5)。**

坂野研究室では、他の学生は既に修士課程までに経営戦略論を学んでおり、自分がこの差を埋めるには大変な苦労があった (SD5)。しかし、それがあったため、基本的、基礎的なところから学びはじめ、特にオーソドックスな研究テーマを選ぶことで経営学の考え方を知り、方法論を身に付けることができた (SG6)。

その後もこの分野に対して、先入観にとらわれず研究を進めることができ、「皆がやっていない、失敗するかも知れない研究方法をやる、わざわざ大変な方に行く」と大学院の同級生に言われ、自身もそれに納得するような現在の研究スタイルを構築することができ、その後、新潟大学に教員として着任した。

2.4 分析的枠組みの設定

TEMの分析的枠組みについては、(佐藤 2012)の研究で用いられている、統合された個人的志向性 (Synthesized Personal Orientation) の概念を加えている。「個人的志向性」とは、自分自身の内的基準への志向性であり、自分自身の個性を最大限に発揮できるという点で、自己実現に近い特性を意味する (伊藤 1993)」としているが、筆者の研究においても、伊藤氏が研究者である父の影響を受けつつ「何か社会にインパクトをもたらしたい」という強い信念があり、この信念が、壁にぶつかり迷いながらも前に進

んできたことに強く影響を及ぼしてきたことは明確であると感じ、〈何か社会にインパクトをもたらしたい〉という信念を、統合された個人的志向性と捉えることとした。そして、伊藤氏は〈何か社会にインパクトをもたらしたい〉という志向性をもちながら、新潟大学に着任する（教員・研究者となる）という等至点に向かうと仮定した。

なお、両極化した等至点（Polarized Equifinality Point：P-EFP）は〈研究者にはならない〉とし、併せて、客観的に見て、伊藤氏の活動内容が大きく変化したと思われる出来事を等至点として三つ設定し、活動期間を区分した。上記でも示したが、今回は伊藤氏の幼少期からの成長過程を追っている側面もあり、等至点三つの設定自体は特に迷うことなく行うことができた。しかし、実際にその過程の内部要素を振り返って語ってもらおうと、そこに辿り着くまでの紆余曲折、そして、そこに辿り着いた後の活動内容の質は大きく変化しており、そこで新たな課題が発見され、それを乗り越えていくことによって伊藤氏自身が成長していったように思えるポイントを明確にすることができた。なお、分岐点についても、伊藤氏の語りから特に重要な選択であったと思われるポイントを選択した。

最後に、必須通過点（Obligatory Passage Point：OPP）として、「会計学・廣瀬研究室に入室」を設定した。この選択によって、より研究に向き合わざるを得ない環境となり、いよいよ伊藤氏が自身の内部と深く向き合った時点であり、その後多くの気づきを得ることとなるポイントとして設定した。併せて、社会的方向づけ：SD（Social Direction：研究者にならない方向へと仕向ける環境要因や文化・社会的圧力）と社会的ガイド：SG（Social Guidance：研究者になる方向へと誘導する環境要因や文化社会的支え）を設定し、分岐点との関係性の中で示すこととした。

表4 TEMのための概念表

概念	本研究の位置づけ
等至点：EFP (Equifinality Point)	経営戦略論の研究者となる。 ①修猷館高校合格 ②早稲田大学合格 ③新潟大学に着任
分岐点：BFP (Bifurcation Point)	①自身で考える楽しさを知る。 ②塾で競争することの楽しさに目覚める。 ③修猷館高校での生活 ④学部での学び ⑤坂野研究室での活動
必須通過点：OPP (Obligatory Passage Point)	早稲田大学修士課程廣瀬研究室での研究活動。

社会的方向づけ：SD (Social Direction) 社会的ガイド：SG (Social Guidance)	〈研究者にならない〉方向へと仕向ける環境要因や文化・社会的圧力 SD に対応し、 〈研究者になる〉方向へと誘導する環境要因や文化社会的支え SG
統合された個人的志向性：SPO (Synthesized Personal Orientation)	「何か社会にインパクトをもたらしたい」という信念のもとに活動をしている。

3 結果と考察

伊藤氏の語りから、伊藤氏の大学教員・研究者になるまでの 20 数年にわたる成長過程の内容を上述した分析的枠組みをもとに TEM 図に示した (図 1)。ここでは、伊藤氏の成長過程を三つに区分し、それぞれを「幼少期から中学生時代」、「高校生時代」、「大学生時代」とし、その過程を分析した。

また、筆者は伊藤氏が大学教員・研究者に向けて進んでいくうえで及ぼした様々な要因を SG (社会的ガイド) 及び SD (社会的方向づけ) として、伊藤氏の逐語を用いて表現した。

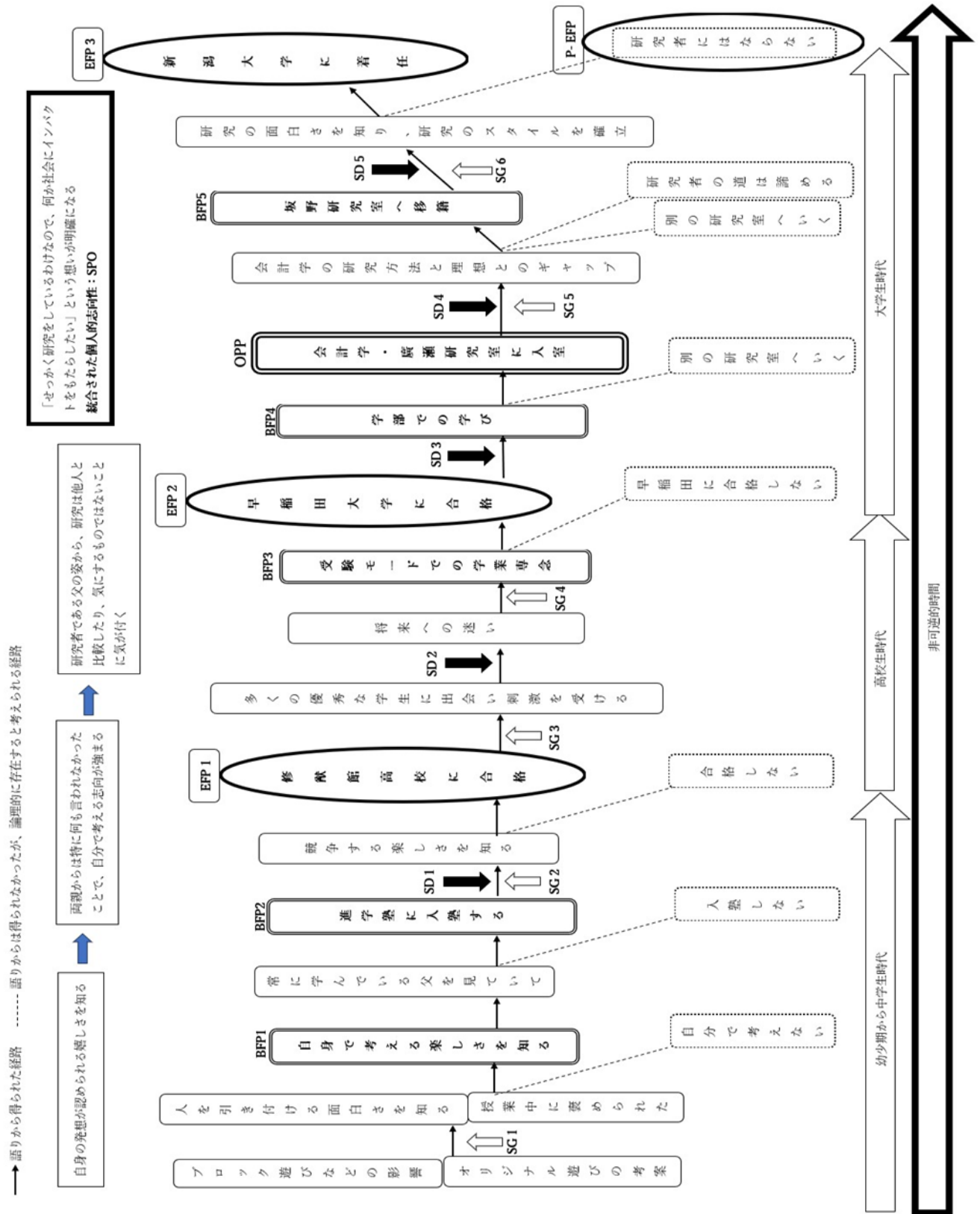
3.1 幼少期から中学生時代：現在の研究者としてのスタイルのベースが形成された時期

伊藤氏は、1987 年に小学校に入学した。小学校時代で最初に思い出されたこととして、授業中に周りが正解できなかった問いに自身が正解できた時の「なんとなく嬉しい感覚」になったこと、また、当時一般的に休み時間の過ごし方として「昼休みは運動場でサッカーをする」というような毎回ルーティン化されていることは面白くないと感じるようになり、グラウンドにあるものなどで工夫して、独りオリジナルの遊びを楽しむようになったが、そこに少しずつ友達が興味を持って集まってきて、チームとなり大勢を巻き込んで楽しむようになったという。ここでは「自分発信のものが人を引き寄せることの面白さ」を感じた、ということ語っている。

この時期伊藤氏は、母方の祖父の影響で剣道を始めるが、怪我 (剣道とは別の原因) の影響で断念している。ただ、この時自宅ではレゴブロックを使った創作や、使い終わった食品トレイなどを使って自身で考え遊ぶようなことを行っている。

一方、講義の中で楽しかったものとしては「社会科」をあげている。担当の教員が毎回オリジナルの教材を作成し、それを使って自身の知らない世界を伝えてくれることを大変面白く感じたといい、その後、小学校 5 年生の時に (両親などの勧めがあった訳ではないが) 自ら進んで進学塾に入塾した。伊藤氏はこの入塾について「(大学教員・

図1 伊藤氏の大学教員・研究者になるまでの TEM 図



研究者である)父が日頃から机に向かって学ぶ姿を幼い頃からみていたので、どこかで勉強っていうものがやるべきこと、日常生きる一つのやるべき作業になっていたのかも知れないですね」とし、併せて「兎に角、両親からは〇〇しろ、などの指示等は一切なかった」と語っている。

この入塾時のエピソードとして、当然この時点では、塾での勉強スタイルが身に付いていない伊藤氏は、塾での最初のテストで2点という大変酷い点数を取ってしまう経験をしている。これは、場合によってはその後の塾生活へのモチベーションを下げてしまうほどの経験となる可能性があるが、ここで伊藤氏は、基礎的な内容から積み上げていくコースに変更することでその後に続く学習スタイルを身に付けている。

中学校に進学した伊藤氏は、より落ち着いて学業に専念できる進学塾に傾倒していく。塾での「順位競争」がゲーム的に面白くなっていく感覚を覚え、いつしか「在籍している中学校の代表」をしている感じもして、勉強を楽しむことができるようになっていた。その後の受験を経て修猷館高校に進学することとなる。

このように、伊藤氏にとって、幼少期から中学校時代までの期間は、伊藤氏の①自由な発想でオリジナルを追求していく精神、②学び続ける姿勢、③体験・実践から学びに変えていくスタイル、など、この後、大学教員・研究者に繋がっていく基礎が築かれた期間として捉えることができる。

それぞれの分岐点において、「(他人に任せて)自分で考えない」、「入塾しない」という選択肢もあったが、伊藤氏は行動に移すことができている。このことは、この後に続く期間でも、伊藤氏がこの時期に身に付けた上記①～③が、それぞれの時期のエピソードに形を変え出現してくるため、非常に重要な時期となったといえる。

3.2 高校生時代：迷いの中でも課題を発見し、集中して課題に取り組むことで大きな成功体験をした時期

高校生時代は伊藤氏にとって、迷走期となった時代である。ただし、迷走期と言っても、ここでは悪い意味ではなく、自分と向き合い、今後どのように道を進めて行ったら良いのかについて、より深く考えた時期であるといえる。

修猷館高校に入学しての印象として、「体育会系みたいな感じの集団的雰囲気であいあいとした雰囲気」とし、勉強はもちろん、部活動などの学業以外の活動にも懸命に取り組むところで、また、学力レベルも同じ層が集まっていることもあり、「ただただ楽しかった」とし、併せて、「祖父が泣きながら留守番電話にお祝いメッセージを残してくれた」など、修猷館高校への合格を周りも大変喜んでくれていることを知り、高校生活への〈責任〉のようなものを感じたとも語っている。

しかし、そこにはやはり非常に優秀な学生も多く、これまで〈勉強〉を得意分野としてきた伊藤氏は「上位層は凄い人たちが多く、多分、この人は間違いなく天才だろうな

っていう人達もたくさんいて」、「高校の間はずっとどのように勉強を進めるかを模索していた」など、これらの気持ちの流れの中で、実際に行動に移すことができずに日々を過ごしていたという。ただし、迷う日々のなかでも「(今後) どのような武器を持つかっていうスタイルばかり考えて」という前向きに取り組み考える姿勢であることは変わらず〈難しいから諦める〉などということにはならなかった。

そして、高校生活の最終となる「受験期」には、「運動会が9月にあって、それが終わった途端に一気に勉強しかないモードにみんなが変わるんですね。怖いくらい雰囲気が変わって、そこから勉強して、また勉強していったりするんですけど、私もああいう周りに流されてずっと一生懸命部活やったり遊んだりして、一気にガラッと変わって勉強に集中するっていうスタイルになったんですね。」とし、「(交流があった先輩の) 合格体験期：努力していて、寝る時間2時間とか、なんか逆にそれ見た時に、これやれば受かるのかもしれないと思って、ものすごくやったんですね。」「もし一人だったら受かってないと思います。自分が持っているはず以上の力を周りの環境が引き出したような感じがしますね。」と語り、上述した、修猷館高校に存在する“体育会系みたいな感じの集団的雰囲気”で、集中して課題等に取り組む姿勢に救われることになる。

このように、伊藤氏の高校生時代は、〈世の中にはたくさん優秀な人材が存在する中で、自分は何を武器にしていけば良いのだろうか〉と悩み、併せて、〈環境〉が人を成長させるということを強く体験した時期となった。

現在では、「この時期、もっとやれたのではないか、もっと全力で走れたのではないか」と思い返すこともあるようだが、この「悔しい気持ち」が、今の伊藤氏の強いモチベーションとなっているとのことである。

3.3 大学生時代(院生時代も含む): 大学教員・研究者としてのスタイルが確立する

大学生時代に入った伊藤氏は、まず学部の講義において、「学部の講義は面白かったが、あまりにも壮大な世界過ぎて、学部の世界が迷いにもなっちゃう。ジャングルみたいな中で、研究者になるっていうのはどこか一本の木を見つけるわけですから、それが見つからなくてですね。大学院に入る直前くらいまで悩んでですね。」、また「(大学教員は) 父親ってこの人たちと同じ職業なんだよなって思うと、なんか信じられなくなってきちゃって。私からするとただ家にいた父親で、それで(大学教員・研究者は) 身近な感じの職業を得たぐらいに思ってたんですけど、本当にこのレベルに私は至れるのかっていうので、それもあって自分にぴったりの一生を注ぎ込めるような研究分野を見つけた人たちだって、それに匹敵するものを自分は見つけないかやいけないと思って、それはずっと考えてましたね。」とし、このような気持ちの流れのなかで、何か明確な

目標などは見つからないまま修士課程で会計学の廣瀬研究室に入り研究活動をスタートさせる。

しかし、この選択が大学教員・研究者への等至点へ向かう流れの中では最大の選択・決断となっていく。会計学を専攻したことで、これまであまり気が付かなかった学者としての父の偉大さに気づくとともに、それを通して、改めて「自分にぴったりの一生を注ぎ込めるような研究分野」を見つけなければこの世界では勝負できないことを理解し、研究対象と研究方法など、自身に合うものは何かを探し考え続けた。その結果、「会計学は自身が探求していきたいこととは違う」ということが明確になり、当時学務委員として学生相談を担当し、伊藤氏も進路の相談に乗っていただいていた経営戦略論の坂野友昭先生の坂野研究室へ移籍することになった。

伊藤氏の感覚的には、経営戦略論は、自由な発想で研究を進めることができること、併せて坂野研究室の研究スタイルが特にそのようなスタンスであり、自身の「自由な発想でオリジナルを追求していく」という幼少期に培われた精神にも当てはまるものと感じたようである。

このように、高校生時代に始まった「(今後) どういう武器を持つかというスタイルばかり考えて」から、大学生時代の「学部の世界が迷いにもなっちゃう。ジャングルみたいな中で、研究者になるっていうのはどこか一本の木を見つけるわけですから、それが見つからなくてですね。」と続いた悩みの過程も、会計学廣瀬研究室に進んだことから少しずつ明確なものへと変わっていったことが分かる。

廣瀬研究室で研究の厳しさと奥深さを知り、だからこそ、改めて自らの研究スタイルを問い直したことで、坂野研究室へと繋がっていく様は、ここまでの伊藤氏の生き方、考え方をベースとして、その後の大学教員・研究者としてのスタイルが確立された時期である。

4 結語

筆者は、伊藤氏の新潟大学における学部での講義、ゼミでの活動及び研究活動等において進められてきた、アントレプレナーシップ育成教育や、それに伴うアントレプレナーシップ・エコシステムの形成に向かう過程の中で、伊藤氏が、様々な形で様々な人々を結び付けていく様相に興味を持ち、直接お話を聞かせていただくようになった(後に指導教員として師事)。そのような流れの中で、現在進行形の活動の基礎となった、大学教員・研究者としての成り立ちがどのような過程を経て形成されてきたかに強く興味を持つようになったのが本研究を始めるきっかけとなった。

最初は、伊藤氏に起きた出来事の実態を浮き彫りにしていくための質的研究として、ナラティブ・インタビューをベースにしたライフヒストリー分析を行おうと進めてき

たが、筆者の中で、対象者である伊藤氏と、互いにより深く理解し合える方法はないかと模索していた中で、TEM図を使用する方法と出会った。

また、佐藤(2012)らの先行研究を参考に、その逐語から社会的方向づけ:SD(Social Direction:研究者にならない方向へと仕向ける環境要因や文化・社会的圧力)と社会的ガイド:SG(Social Guidance:研究者になる方向へと誘導する環境要因や文化社会的支え)を設定し、併せて、個人的志向性(Synthesized Personal Orientation)が統合されていく様子を描写することで、時間の流れと伊藤氏の葛藤する思いを示した。なお、EFPについては、それぞれ①修猷館高校合格②早稲田大学合格③新潟大学に着任を設定したが、このポイント前までの試行錯誤と、このポイント後の活動の質が大きく変化した出来事で、それぞれの段階における過程を適正に表現する事ができたと考えている。

本研究におけるTEM図は、実際に伊藤氏に見てもらい、フィードバックをもらい修正を加えている。この作業によって、調査協力者の伊藤氏に、本研究内容についての安心感を与えるものとなり、その作業の段階において、各ポイントを深掘するような発言もあり、本研究をまとめていくにあたり、TEM図を通じ、適正にコミュニケーションが取れていると思うことができた瞬間でもあった。それはやはり面接(インタビュー)等のデータだけではその内容をまとめることが難しく、それらを表現すると分かり難いものになることもある中で、TEM図にすることでそれが大きく緩和されたからだといえるだろう。

本研究は、今や世界中の多くの研究者のテーマとなっている、アントレプレナーシップ育成教育、アントレプレナーシップ・エコシステムの形成における重要なアクターである〈大学教員・研究者〉へ進む道程について、日本の地方都市において成果をあげている若手研究者に調査協力を依頼し、面接(インタビュー)をベースにTEM図にまとめ、各ポイントを捉えてきた。本研究の過程では上述したように、個人的志向性(Synthesized Personal Orientation)が統合されていく様子を描写したが、伊藤氏の活動のベースには、「研究者である父」があり、身近な存在、身近な職業として、「大学教員・研究者」があった。時間の流れの中で、社会的方向づけ:SD(Social Direction:研究者にならない方向へと仕向ける環境要因や文化・社会的圧力)や、社会的ガイド:SG(Social Guidance:研究者になる方向へと誘導する環境要因や文化社会的支え)が様々な形で表れてきたが、それでも等至点に向かうことができたのは、この個人的志向性(Synthesized Personal Orientation)が支えになっていることが分かる。このことから、幼少期からその職業の方々と触れ合う機会を創ることは、その職業に対する先入観を和らげることに繋がり、その職業を目指したときに、多少のマイナス要素に遭遇しても、これを乗り越えていける原動力となっていくのではないかと考える。その意味では、このような機会を設けることは、大学教員・研究者を育てる過程だけでなく、アン

トレプレナーシップの育成等にも応用できるものではないかと考える。また、本研究では、「環境」の大切さも重要なポイントであることが分かる。伊藤氏の場合、「塾」、「修猷館高校」、「早稲田大学」ということであったが、その時点で出来る範囲で、自身の最適な環境に身を置き、最初はどうも適応できないこともあったが、その後はその環境に適応させている。自身の力だけでなく、環境の力も借りて課題を克服する。これも、大学教員・研究者の育成については言うまでもなく、また、アントレプレナーシップ・エコシステムの形成には欠かせない要因とされている。

最後になるが、本研究で筆者が一番印象に残っているのは、〈大学教員・研究者は、一見すると華麗な経歴の部分だけが強調されてしまうが、その間には、様々な葛藤があり、迷い苦しみながらも、自身の課題を克服してきたのだ〉ということに改めて理解することができたことである。通常では明らかにされることがないこれらの経験等を示すことができたことは大きな成果であり、この事例は今後の大学教員・研究者の育成に対しても必要なことを示唆している。これは本研究において TEM 図を使うことにチャレンジしたことで、特に社会的方向づけ：SD (Social Direction) や、社会的ガイド：SG (Social Guidance) を探り、研究協力者と共有できたことが要因であると考えている。従って、今後は、本研究をベースに、各期、特に「大学生時代」をピックアップし掘り下げることを進めると、大学院生だけでなく、学部生も含めたキャリアサポートなどに資するものとなっていくであろう。

なお、今回は伊藤氏の〈大学教員・研究者〉になるまでの育成過程の経路をまとめたが、この後、「大学教員・研究者」としてどのように教育活動を行い、また研究活動を進めてきたのかについて、どのような経路を辿ってきたのかなど、今後も研究の対象として、現在進行形の伊藤氏を追いかけていこうと考えている。

【注】

1) 伊藤 (1993) は、一志向性とは、自己概念を形成する際の基準の方向性を意味するとしており、志向性を「個人志向性」と「社会志向性」の 2 つに分類している。「個人志向性」とは、自分自身の内的基準への志向性であり、自分自身の個性を最大限に発揮できるという点で、自己実現に近い特性を意味する。一方、「社会志向性」とは、他者あるいは社会の規範への志向性であり、社会の中でうまく適応していくための特性を意味する。

【参考文献】

Agrawal, A., & Cockburn, I. (2003). The anchor tenant hypothesis: Exploring the role of large, local R&D-intensive firms in regional innovation systems. *International Journal of Industrial Organization*, 21, 1227-1253.

AlfonsWeersink EvanFraser David Pannell Emily Duncan Sarah Rotz(2018). Opportunities and Challenges for Big Data in Agricultural and Environmental Analysis Annual Review of

Resource Economics Vol.10:19-37 (Volume publication date October 2018)

Amalya L. Oliver Adi Sapir (2017). Shifts in the organization and profession of academic science: the impact of IPR and technology transfer *Journal of Professions and Organization* Volume 4, Issue 1, March 2017

荒川 渉・安田裕子・サトウタツヤ【2012】「複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例」立命館人間科学研究. 25、95-107

Bill Ballantine (2014). Fifty years on: Lessons from marine reserves in New Zealand and principles for a worldwide network *Biological Conservation* Volume 176, August 2014, Pages 297-307

Cavallo, A., Ghezzi, A., & Balocco, R. (2019). Entrepreneurial ecosystem research: Present debates and future directions. *International entrepreneurship and management journal*, 15, 1291-1321.

Colombelli, A., Paolucci, E., & Ughetto, E. (2019). Hierarchical and relational governance and the life cycle of entrepreneurial ecosystems. *Small Business Economics*, 52, 505-521.

Edmondson, A. & McManus, S. (2007). Methodological Fit in Management Field Research. *Academy of Management Review*, 32, 1155-1179.

Fuqiang Yang Yujie Huang Jing Tao Genserik Reniers Chao Chen(2023). Visualized analysis of safety climate research: A bibliometric data mining approach *Safety Science*

藤田 結子・北村文【2022】「現代エスノグラフィー」新曜社

Gabby Walters Yawei Jiang Shanshi Li(2023) Physiological Measurements in Hospitality and Tourism Research: A Systematic Review and New Theoretical Directions *Journal of Hospitality & Tourism Research*

Gihan S. Soliman (2016). Opportunities and challenges of managing the rhizosphere's biota –for food intensification, through controlled application of fertilisers with commercial arbuscular mycorrhizal fung MSc 2014-2016, School of Geosciences, University of Edinburgh

グラハム・R・ギブス【2017】「質的データ分析」新曜社

ハロルド・ガーフィンケル【2016】「エスノメソトロジー」せりか書房

伊藤龍史【2021】『にいがたアントレプレナー学』、新潟日報事業社

伊藤美奈子【1993】「個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討」*The Japanese Journal of Psychology*. 1993, Vol. 64, No. 2, 115-122

伊藤美奈子【1993】「個人志向性・社会志向性に関する発達の研究」*Japanese Journal of Educational Psychology*, 1993, 41, 293-301

狩野光伸【2019】「論理的な考え方」慶應義塾大学出版会

近藤克則【2018】「研究の育て方」医学書院

Le Galès, P., & Voelzkow, H. (2001). Introduction: the governance of local economies. In C. Crouch, P. Le Galès, C. Trigilia, & H. Voelzkow (Eds.), *Local production systems in Europe*. Oxford: Oxford University Press.

ロバート K. イン 【2019】「ケース・タディの方法」千倉書房

Maznevski, M.L., & Chudoba, K.M. (2000). Bridging space over time: Global virtual team dynamics and effectiveness. *Organization Science*, 11(5), 473-492.

マイケル・アングロシーノ 【2022】「質的研究のためのエスノグラフィーと観察」新曜社

松重和美・三枝省三・竹本拓治 【2016】「アントレプレナーシップ教科書」

前田泰樹・水川喜文・岡田光弘 【2021】「エスノメソドロジー」新曜社

中嶋 洋 【2015】「初心者のための質的研究 26 の教え」医学書院

N・K・デンジン Y・S・リンカン 【2008】「質的研究ハンドブック 1 巻」北大路書房

N・K・デンジン Y・S・リンカン 【2008】「質的研究ハンドブック 2 巻」北大路書房

N・K・デンジン Y・S・リンカン 【2008】「質的研究ハンドブック 3 巻」北大路書房

大久保孝治 【2008】ライフストーリー分析—質的調査入門」学文社

太田裕子 【2022】「はじめて質的研究」を「書く」あなたへ」東京図書

Roundy, P.T., Bradshaw, M., & Brockman, B.K. (2018). The emergence of entrepreneurial ecosystems: A complex adaptive systems approach. *Journal of Business Research*, 86(1), 1-10.

斎藤清二 【2018】「事例研究というパラダイム」岩崎学術出版社

桜井厚・石川良子 【2021】「ライフストーリー研究に何ができるのか」

サトウタツヤ 【2023】「TEM ではじめる質的研究」誠信書房

サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真美 【2021】「質的研究法マッピング」新曜社

サトウタツヤ・安田裕子監修 上川多恵子・宮下太陽・伊東美智子・小澤伊久美編 【2023】「カタログ TEA—図で響きあう」新曜社

Spigel, B. (2017). The relational organization of entrepreneurial ecosystems. *Entrepreneurship Theory and Practice*, 41(1),49-72.

Stam, E. (2015). Entrepreneurial ecosystems and regional policy: a sympathetic critique. *European planning studies*, 23(9), 1759-1769.

Stam, E., & Spigel, B. (2018), Entrepreneurial ecosystems. In: Blackburn, R., De Clercq, D. and Heinonen, J. (Eds.), *The SAGE Handbook of Small Business and Entrepreneurship*. London: Sage, 407-422.

Stam, E., & Van de Ven, A. (2021). Entrepreneurial ecosystem elements. *Small Business Economics*, 56(2), 809-832.

Sussan, F., & Acs, Z.J. (2017). The digital entrepreneurial ecosystem. *Small Business Economics*, 49(1), 55-73.

スタイナー・クヴァール 【2019】「質的研究のための「インター・ビュー」」新曜社

田村正紀 【2020】「リサーチ・デザイン」白桃書房

高木廣文 【2021】「質的研究を科学する」医学書院

Thomas McGhin Kim Kwang Raymond Choo Charles Zhechao Liu Debiao He(2019). Blockchain in healthcare applications: Research challenges and opportunities *Journal of Network and Computer*

Applications Volume 135, 1 June 2019, Pages 62-75

ティム・ラプリー 【2018】「会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析」新曜社

Timothy Onosahwo Iyendo(2017). Sound as a supportive design intervention for improving health care experience in the clinical ecosystem: A qualitative study *Complementary Therapies in Clinical Practice* Volume 29, November 2017, Pages 58-96

トニー・E・アダムス ステイシー・ホルマン・ジョーンズ 【2022】「オートエスノグラフィー」新曜社

土元哲平 【2022】「転記におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー」ナカニシヤ出版

ウヴェ・フリック 【2019】「質的研究のデザイン」新曜社

ウヴェ・フリック 【2022】「質的研究入門」春秋社

安田裕子 【2005】「不妊という経験を通じた自己の問い直し過程—治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から」質的心理学研究、4、201-226

安田裕子 サトウタツヤ 【2020】「TEMでひろがる社会実装」誠信書房

安田裕子 サトウタツヤ 【2021】「TEMで分かる人生経路」誠信書房

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ 【2018】「TEA理論編」新曜社

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ 【2022】「TEA実践編」新曜社

About the process of training university teachers and researchers

who will serve as a hub for EE formation

~ Exploring life path using TEM diagram ~

Kaishi Professional University Assistant Professor Tojo Ayumi
Nagaoka University Professor Kurii Hidehiro

Abstract

The purpose of this research is to work on "entrepreneurship education and the formation of an entrepreneurship ecosystem," which is the subject of research by many researchers around the world, and to achieve results as a university teacher and researcher in the local city of Niigata. This paper focuses on Ryoji Ito of Niigata University, and attempts to clarify the factors that led him to become a university teacher and researcher.

The author notes that until Mr. Ito took up his post at Niigata University and began his activities, there had been no noticeable movement toward fostering entrepreneurship at the undergraduate education level in the region. I had the opportunity to hear about his thoughts on research. Under these circumstances, I became interested in the fundamental aspects of Dr. Ito's work as a researcher, which led me to proceed with this research.

First, we conducted an interview to ask Mr. Ito to tell us about his childhood, and based on this we transcribed the story using the KJ method, and proceeded to create a TEM diagram based on that story. Next, we showed the path to becoming a university teacher or researcher according to the rules of TEM diagramming, and analyzed the points at each stage, from the branching point to the solstice.

This research carefully explores the life paths of research collaborators using the concept of TEM from their "life stories" based on their personal experiences. It is positioned as a preliminary step to investigating and exploring "how I have been active as a university teacher and researcher" which I plan to do in the future.

Key words : TEM, life story, university teacher/researcher, entrepreneurship,
entrepreneurship ecosystem life cycle